



• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

大德



門號
13
1616
4

今古小說唐錦卷之四

土居是羞妻の恨と報ふ話

或曰嫉妬の二字共ふ女より夫の婦の
男より最くおし不擧婦人の姫の一つ男よりおじひの妻
おとおじひ窮どおじ勢どおじ己の勝つ者とおじ己よおじて
者とおじ己名とふさんと娘と人の先をもじとおじ己
名とからとてひそびて人の名とかとておじ娘と
おじ言女のめじひ宴小みて男めめじひ宴至く大きうお
風のめじひやまの良の郎ふ士官を荒とて多くめ娘とお家
法正に布と商よ富民あり奉きと彌縫うて産業に営み
よく父業アシ能あど済あらふ宣まるあたううれ

大德
土居是羞妻の恨と報ふ話

かうくはまとも世の人にとて庵ひじきもば外賓でんがす
名ふりもうけぬび男の如くにあつて大河原の娘
をうなぎほのゆく姫て離がるやんとしらしもばくふゆ
うらぐのと竊小吉とあらえ巴毛丸又夢うとせ
て巻と振つ分と備ぐわくそじ葉横と晴さんとらす津石
かげとば治方うしゆく日と遙うる所ある时ひ談計とは
アキ庵あつて酒宴とゆ醉中に名前後とおきだしけれ
美人と書ふやと毛庵がまう敷うる處まふ難とゆく石裏
の西居とあくしかまがいふゆきゆううと世の人と離く終
は離別せん名宿うと名ひがまう付うひりども空虚が向見
夜被よ洋服をたまうと福まくかどすて刀と鎧と印出立

かうく庵毛の男或人よおおとおもせあうなみがゆくもが立の娘
ううふむれん余がちくとつとと更め作みく云うるに奉う
よまくからね本とナリ本うかくが酒宴の興と離うす
やくまは尼姫が同室我妻と近づくとゆく密計みて聲
ととく怒うふゆど教習て聲慣どあざんと身外れう妻
不景の虚名すとぞ難と迎うじのあまうと小自害うと
こうじ死體よゆううとあゆうとく我も切抜でんと三種
しきうとおのの苦と寢びがらも小豆屋敷うち老の寝敷
中まねく跡をがいゆと面立ちのゆく戒罪えんざい一ゆく竹色
あらが方をう難ふあづとゆうもと毛庵の二人せ後前
とまふ冰れみと抜くとけ経よなんで娘んとまうが家跡



又く合掌して首の筋と徐々と四重を拂ふとふるま
く歎と歎と歎と擇遠處て念と願と願と不思議を嘆あを
うゆ候鬼の獄卒小吏ひろがゆきが多難候と云う
多ひき力と振よろふ毛衣ふほひはあ人の男と
ぬりゆきもむらう風の生と死とゆどくと小柳う令
の代ふ頭と別長く世ノ矣種ふすほんよ物のあくよ
み毛衣もすゑは女事ふあうたう者と今朝とよけ食と
飴とて像前とさうだ妻の退居をきうん相能とあひ凱
みうきわあどとづきと金とゆうとて妹も小庶民もまへ心
廢と厭つて免と角もすくまでうふ毛衣紙手とおもせ
いふく御聲とて念と助人と能と能と能と能と能と一と酒と

と二人よきと珍せ向う文とゆきて

足下に研儀僕等始之狂貴計欲令令室蒙不義
之虛名今害僕等欲解怒然依從者之言忽免
死刑願謝罪足下寛仁銘肝膽長不忘頤首百拜
と書しめほよ壁を記し血判とぞし憤切一涙刀と呼て蟹
と利落一往きも殊勝のは所をうれたりしきつて妻の死難と
入室とあと弟のりをく海うちむせた修復と又念を
きで會葬され極入石窟へて高人ゆくも仰ぐ人間とせびと蟹長
じうと待うるふ世のゆくもゆくも死難が妻の同窓をしてつひへ
はゆうてゆく小茜のけとまくめうとく死難と又セナラムアテ妻
アテ死難と人立まきと栗くも立く恨と娘と娘と娘と娘と

もうやくあらふ又發ひて足跡を残すと、かのじゆくとて
てお食とそろふあさし事とよしの仕事者も全とまと
仇とさんと連合してあらむ一度去をかねまへびへんとやらじ
是義心とゆきばか事もうんと連合りる者とおふす
重くちくしきゆすまほうと侍ど日敵づふまくし事も
争ふ下とそとえ縁よりもなうとぞトナリぬめもうちたまし祕
争とかしうせふ御とゆめをもゆられ

三刀五兵虎鉤雲と鉤と詰

尼子陸奥を支ひ久間の不將として二万八千余騎と作れ
ハヌウニシカ宣戦書をかかげて東軍擣破一押入十七箇所乃
ハシとひはく一力田のあふ事無く死にもの終ひしと被りんとせん

新序 海にて素戔和氣と呼ぶ事無ふ江軍惱迫して東西と繩ざう
一ノぶ詰に交波の熟路小僧で防ぎける。山田のなかま近江
名古屋と海の浦と石高門家と京極の源と傳。蓑ひぢま
まともく勢ひ弱きて引退すに晴日の事すをぞ櫻庭ある小船
船が経刀とらひ是なり。者少持せすにち若狭とく経刀が浦上
とゑけふ。舟平井法主があと毛角の言をう者もたゞ一ふ
晴日の船を二刀及く東京とまよけ財津平井家がたゞ一
船りとそとあて事ふ食とせばら草とてれぬとあつて
の法主またとく食を年ふ度すめあるとせんと年にあ

卷之三

10

居りみまへもあらひ聲あはれ風流優もりのめそを
き勇あるをとひて今はとくじ小龍修虎ノ贊とわん
とくまく向、さかのるもといふ虎高キテアリもかく
をまきつゝ珍骨碑えいこひ身みは縁セラキアリとも晴
ク金玉あど産うぶとくまきば武虎ハ一通の書しょとみ
て其下より竊ひそかふ擣う州しゆ野の鷹たかとおり浦上家うらじょうけ京き小
姓せいとさりりと總そう仰あおめがたとび家いえ京き姓せい號ごうとよく處
初はじよちとくまきのとがまふ活はくみまひ豆まめの功こう
かよ多たくすうけとばや家いえ又また老お不ふ寢ね
家いえが直ただ日ひにあよわう都と小こ傳つら孫まご貞じやう良らう劍けんと一ひと向むかけ
称めいた、肩かた傳つら手て武ぶ虎こ今いまと拂はひ錢せんと

居りやうへ虫と除けたまふが、小船は軽力のすみを
こうじてひかりを拂はせども、家業更に産とゆるもあらず
もとば圓蔵と渭と曰ひ少く候うべからずわと申すが
忽ち計と申す。又圓蔵は、件やうと申すが、かくり
事焉よしと有りて、あはれ一夕かかづて居らしゆ
福と燃えうて煙まくきのぎとばとやく城中昇の櫻が
く彌久と申されとあひて、家業も刀を挽く事と申され
あ虎狩りと經力と腰ぬにて出でますかとも大角うと
おもてあまの里をへて、見ば是れやのびくふりとて
跡よこむと申す。とさへて、見ば是れやのびくふりとて
よがめで、車にぐるせ、車廻はねとひどほよ月日と申

りと坐よ船の如く、暮りを以てと泊と云ふが、小女か
乃へて、ぬづくよゆく思ひて、若れつゝ車にまわるの
事なり。清ひい家、あゆみ醉く脚も内と細い枕の毛
うち隠しゆきかゝりて、やく家、衰眼といひて、かゝる捕(安)、
小家まゝ、家康の隠しゆきとすら、よきと傳ひ、安
て、美つむじが、あびて、風がう更よ、はがす、す席中にあ
富國の美金と、とくとく弟、う、清福夜嘗と、あらうと思ひ、清
に、すまひと、ゆめ、父の、おふ、死とゆうと、乍ら、ア
家、家、萬葉など、想うた事て、ありえぬ、じと、家、の、家
終、余、死、しつけ、生、死、二門の鬼うと、忽ち腰の刀と持て、
教、う、もあく、う、虎もあわうと、う、び、持て、せんと、あ

之の刀小刀とうげ居しも小刀ふがま扇と詠ふる原ふや絶
外者も又教育とまろうちふ家、京が領地の百姓一人の
盜賊と捕（あち家、京向罪種の漁夫と榜開ふを麻姓）
乞の勧は旅店と宿泊人を爲り賊室ある者（吉田、某酒と
ちとねりゆまさる言とどもし飲、必ず立併麻本とて也の
から割強から今晓物と傳くとと清らか事乃カラとも
素あじに内移転て城室と奪より故事ナリと曰ふ
主事事の方、行と用ひてあと弱るの賊の向鳥頭（ササギ）み鷹蛇と合
せ抜き、勢酒小投と用ひて之を生そ、蒙汗酒と
仰まほはれあぬもう傳くせまうと並今ふ魔虎こそと
物語りて之をひそび鳥頭鷹蛇と並み者と通ひ

故の事は多數の人と奥へおもてなしを虎、宴席を
開いて各種碎肴及び敵人を、やうやく酒と熱くむすめゆく
が、彼毒草とくらべて、追ひけり。皆、粧碎乃し。まことに、
引取る餘程の勿らみ件、麻あて、精神、時々、まことに、
よき例へあし。成虎、家家、従ふる。家臣の達と云
者、熟く、うるさき、が、必ず、經力と、内歎、憤懣に、かくもんと
え、か、破り、也。者、酒と飴と、ぬけぬけ、いと、如き、誰一に
斬倒し、行氣を以て、出ひゆるが、かた、麻あて、酒宴を
中から、とおもひ、かくも、能く、猪突と、せび、と、主従よしを
元子お館、おもて、輕刃と、出で、と、腰を、腰を、腰を、腰を、腰を、
嘆で、うつの方へ、腰を、腰を、腰を、腰を、腰を、腰を、腰を、腰を、腰を、

家業いえごが手ての毒どく薬やくであつたと解わかる。急いそに之を
急いそに之をかう者ものが多おほいとされ、其その中なかに
と心悔こころなまりの情じゆが意尾おのづに後悔ごくわいとして傳つたへり。

考ふ向頬みて嫁といふ詰

あらうひよご
務川多庫のほふよ養寛和のよ者めり父ハ三ね家代後人
まうう寛永年間よりとゆすど學紫と号びるふ風流温
雅みてよしとて更づぐまどは納の功と稱せんした極き事
御身く廻るよがゆふもじにき騒動をかげり也(國)之騒
乃そくもとてやまく飲食ゆゑふ事アラシヨリ前アモ二人の
妻あり男アリテフ番してえち娘と嫁シ夫アリモ若き
トニモ女房とひくと妻アリ夫アリサキと嫁シしき歎



御神乃事よりきり、御靈の事よりまひ生婦事と
約一、重うるを二人の事と考へて、すこし
は、より北邊と、まへるやうにほのふ父よたゞ
と、御神体よのう父の事と記せり。柱牌とありて、夕
よすく解りとて、いとくべ、まゐあつたゆよじひの後
あらぬ御解せす。又やまとくちういびくは、便あきや事お
いととおもひとて、かたむけたりとて、わが身
とたゞさう、不善の心とすらりとて、十日未満とあつて
詔書とめうち力りとよかざら奉り、んひの事と
かとひそんぞ、まよ處をもれ母子風とす。せが孝ふ
くとぞ、まよ處をもれ母子風とす。せが孝ふ

の事あらうるふ母娘ハ嘗て本巣の山あじとゆへ御食事
をあまねく詔書とめぐりて娘祀あらむ修めく父とまよあひ
とまよ高人承と汝承（うそ）その日モ萬歳と三歳と記した
ある日とがく人詔書とて待てうす御月とがくも元
少く事あらば也（おほに）はよつて父あれあらん船難風より
海ふちづきやかまよ御庵（ゆきやま）よりも行方とあらばと性す
告る者あらば母娘文憂（ぶわい）と御死事とゆねりと
高伝もきりと海よ觸（さわ）毛取（とく）うるうりとひきら母娘
と御衣と妻（め）と佛事坐言（ざわん）のふくと漸（よみが）せども妻（め）が
又嫁（よめ）てゆあとおひびととしよきだも御と初（はじ）うり（うり）お
おちり（おちり）ふき水（みず）と夫婦よせんありまだいまだ晝（よみが）れとき

おまきと一度生（おき）と持一御子を擇（えら）とくとくびまきと持
ゆくゆくとゆくとえよしきうと密號（みしやく）も嫗（おとこめ）ひなを送
て嫗（おとこめ）とのそらめく後若多（ごくわくた）うららと女郎金石
とくやーも勧（すす）めがくとハ御（ご）とくとくあびたとそ人
もかく年を八十九葉（せきくわく）にひ母（おはな）八十にあすれ附（つき）忽ち四
里の人多くあらうりの宿（しゆく）はあらひ父と席（せき）と坐うるやく
じふよ出（で）て母（おはな）はまくに候（まわす）とたゞきて歎きあらすと
かくこもせぞあらうふ程（ほど）とちうへ十あまりとちうづれ壽（じゆ）二八
寧（なぎ）ちが母娘よじうひお年を経ゆくとくとくよひ父と新（しん）車
とくよすきぬふとんとあらん承（うけ）と御車（みやこ）に御坐（おき）あらし廢

國へ歸る所不の險路危険とあざやかに駆け
年と車のうち小被地と産業とまことにかげと
あらわすと御身取とつまうね乃家と様子と海船と
とく旅はしこいかうとまづぐくも方対寛水と水
なれりとお母い爰うととと正にまど坐と揚て
ほりあよ祖母とああノとらの小神とあらう慈心の
力見る節れりと感嘆でる事かとたじよる事
あきをかよる祖母生とてそしと里のよあび生ぬ
祖母慈うるあらわくは塵土うねの窓と持かくと
まくは萬葉扇と御もとおもゆく懐古とと確乎と
よあく二子年老うとつとまほとがをひよくと
筆とゆくしむる

父母ハ日と摺ミ玉水琴よ娘とたゞじ城小築白盤モ
トドケ玉屏のかくひととひとハ吉久志富右衛門奇達
からと内乃人酒うけとて賀美一けりとぞ處うる後代
乃風信天國より君主とゆるし宣かる切那と因みく
筆とゆくしむる

安永十年 辛丑正月

書舎

京寺町三条上町

菊屋安多

今古小說唐錦卷之四終

大尾

頃日遊攝之山水過伊丹阻風
雨淹留米日不甚旅館宅寒時
偶得其鄉人榜園子而美小說
題唐錦者讀之事彰奇而備
寫人世交化之歧極摹形歡離
合之致可謂為導愚諭俗之書
矣崔叔之餘所請作老命刷刷
唐行于世云爾亦九年庚子
正月穀旦乎為墳土并圃也

